

来賓挨拶

高知女子大学長 木 原 正 雄

木原でございます。今日第14回高知女子大学看護学会が今日から2日間に渡り開催され、日頃研究されて来ました成果の発表と「人間の発達」をテーマにしたシンポジウムが行われますことを心から御喜び申し上げます。

この一年間を振り返ってみますと、医療技術の中断なき進歩の中で臓器移植の問題が大きく新聞に取り上げられました。また臓器を移植する場合必要な新しい臓器を確保する為に脳死を死とする論議が大きく出て参りましたことは皆様既に御存知のことと思います。

私は医学のこと、看護のことは全く素人でございますので外からとやかく言うべき知識をもちあわせておりませんが、私は経済学を専攻しておりますので、すぐ心配になりますことは、臓器移植、脳死のそういう論議の問題と共に新聞で報道されました様な日本人がフィリピンへ行ってフィリピン人の腎臓を移植する、というような記事のことであります。新聞によりますとその背景には、臓器の売買というふうな問題が介在しておるともいわれております。また多額の金銭を代償とした日本人のイギリスでの臓器移植というふうなことも報道されております。そのようなことが事実としますと、人間の生命が売買の対象となり、人間の生命が技術の為に物象化されるということになり、そういう心配があるのではないかということでございます。このことは、人間の生死、生命の尊厳に大きな問題を投げかけるものであります。

この一年の臓器移植、脳死の問題を私なりに考えてみて、いろいろ心配をしている訳でございます。と申しますのは最近我が国では、経済に関することでございますけれども、国民の間で資産と所得の格差が非常に大きくなっております。その原因は、株の投機や、株価の異常な値上がり、あるいは御存知のように地上げといったようなことがおこなわれ土地価格が非常に高騰していることであります。その為に、いながらにして資産が増える人が多い、数の点ではほんの僅かでございますけれども、そういう人達が出て来ました。昨日発表されました今年度の経済白書も「持てる者と持たない者」の間の格差が拡大しつつあることを指摘しています。それとまた最近クルート問題等からもわかりますように、不公正、不公平なことが非常に多々みられるのは感心したことでないと思います。

医療の問題につきましても、老人福祉の問題を見ましても資産の無い人は病気になっても満足な治療を受けることが出来ない。老後の生活に対する不安は増々大きくなっていることは否定できない事実でございます。しかし我々人間社会では全ての人々が豊かな生活を送り、安らかに自分の生涯を終わることが出来るようにならなければならないと思います。経済学の究極の目的はそういう所にある訳でございます。ところが何故そうならないかということをお我々考える必要があると思ひ

ます。高知女子大学30年史に、おそらく和井先生のお言葉だと思いますが、「看護学こそは人間を研究する本来の科学である」と書かれておりますが、私はまさにその通りではないかと思ひます。人間そのものを対象にする看護学の専門家である皆さん方に対する国民の期待は誠に大きなものがあると思ひます。高知女子大学看護学会の御成功とより一層の御発展を祈る次第でございます。先程御挨拶のなかで会長がおっしゃいましたように、本学の看護学科は公立大学、国立を含めて戦後初めての4年制大学でございます。それだけに先進的な役割を皆さん方は演じて来られた訳でございますし、歴史も長く、先程会長からお話が有りました様に、やはり一層の発展の為には大学院の設置ということも今後考えなければならぬと考えております。是非ともそういう方向で努力したいと思っておりますので、どうぞ今後とも高知女子大学、特に看護学科に対する御支援御助力を御願ひし私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。